

研究論文

『土左日記』における仮名表記の特色 ——「ア行のエ」「ヤ行のエ」に注目して——

石塚 秀雄¹

青谿書屋本『土左日記』においては、その仮名表記に関して、二点の大きな問題点が在ることを前稿<研究ノート>（注①）で指摘しておいた。

本論文は、そのうちの一点「ヤ行「え」とハ行「へ」との混同」について調査、検証し、この混同は既に原本たる紀貫之自筆『土左日記』において生じていたのであろうことを論証しようとしたものである。

キーワード： 『土左日記』、ヤ行の「江」、ア行の「衣」、ハ行の「へ」

一 青谿書屋本『土左日記』に見られる仮名表記の問題点

『土左日記』には、その原本（貫之筆本）の面影を伝える優れた写本が4種類あることは、既に前稿<研究ノート>に記した通りである。

そのうち、最も善本とされる青谿書屋本（以下「青本」と略称する）にも、理解に苦しむ表記が存在する。その一つが、ヤ行「え」とハ行「へ」との混同である。
以下その実態とその発生理由とをさぐってみたい。

○ヤ行「え」とハ行「へ」の混同の具体例

青本『土左日記』においては、次の4語に混同が見られる。

動詞「見ゆ」「思ほゆ」「聞こゆ」「絶ゆ」の未然形または連用形

これについては、『土左日記』研究の画期的名著『古典の比判的處置に関する研究』（池田亀鑑・昭16）において、早くも指摘されていた。池田博士はその原因を「もとより原本に「へ」と書かれてゐたのでもなく、「へ」と認識され易い或る文字で書かれてゐたからである」（第一部・P.160）とされた。つまり、原本（貫之自筆本）には混同はなく、全て正しい表記、すなわち、「見江」「思ほ

1 日本教育大学院大学 学校教育研究科

江」「聞こ江」「絶江」と書かれていたに相違ないとされたのである。(同・P.158)

はたしてそう断言してよいのであろうか。貫之自筆本『土左日記』から直接臨写したとされる諸写本を点検し、その正否を確かめてみたい。

二 諸写本における混同の実態

ここで使用した写本は、次の三本である。

- ① 青本 (新典社刊 萩谷朴編の影印本 昭和43年初版)
- ② 定家本 (育徳財団刊 尊経閣叢刊の複製本 昭和3年)
- ③ 三条西家本 (武蔵野書院刊 松尾聡校註の影印本 昭和18年)

この三本の性格については、既に<研究ノート>に記したごとく、①は、貫之自筆本を直接転写した為家筆本を一字違えることなく写しとったもので、池田博士によって原本に最も近いと判定された写本である。②は、貫之自筆本を藤原定家が直接写し書いたもの。③は、やはり貫之自筆本を直接臨写した三条西実隆本をそっくり写しとったものである。

周知のように、貫之自筆本は現在判明しているかぎり、4回に渡り直接転写されており、上記三本とは別系統となる松本宗綱転写本を写した近衛家本も存在する。しかし、この本は池田博士により「近衛家本の仮名は原本再建のためには根拠となし難い理由がある」(第一部・P.159)とされた写本なので、今回は研究の対象には入れなかった。近年、この宗綱筆本系に属するものとして、日本大学図書館蔵本が笠間書院より複製本として公刊(昭和45年)され、鈴木知太郎氏の解説によれば、「貫之自筆本の面影を伝え、(中略)宗綱自筆本系統本の真価を高めて、これを青谿書屋旧蔵本、三条西家旧蔵本などとほとんど伯仲の間におくに至らしめるもの」(同書・P.119)と評価されたが、時代的に当然ながら池田博士の調査比較の対象写本とはなっていないので、今回は参考として使用するにとどめた。

では、これらの写本において「見え」「思ほえ」「聞こえ」「絶え」の4語はどのように表記されているのであろうか。詳しくは後掲の資料(3)～資料(6)を見ていただきたいが、すべてをまとめてみると、**表1**のようになる。(青本は青谿書屋本の、定本は定家本の、西本は三条西家本のそれぞれ略称である。)

【表 1】

		Ye・e類			He類	
見ゆ (7語)	青本	み江	1	見盈 1	みへ	6
	定本	見え	5		みへ	1
	西本	見え	3		見へ	4
思ほゆ (2語)	青本	おもほえ 2			おもほへ 2	
	西本				おもほへ 2	
聞こゆ (2語)	青本	きこえ 1			きこへ 2	
	定本				きこへ 1	
	西本				きこへ 2	
絶ゆ (5語)	青本	た江	1	たへ 4		
	定本	たえ	2	たへ 3		
	西本				たへ 5	
<合計>		16語			32語	

この表から、いくつかの重要な事柄が見えてくる。まず第一に、本来はヤ行の「え」である部分がハ行の「へ」で表記されている割合が極めて高いことである。e・yeと書かれた16語に対し、丁度2倍のhe表記が出現している。しかも、「恣意的な書き換え」が多いといわれる定家本（この点については後述する）を除くと、e・yeとheの比率は、実に前者5語に対し後者は27語となり、前者の6倍近くとなる。一体、誤読される可能性が正しく読まれることの6倍近くになる表記などすることがあろうか。

次に、e・yeと書かれた16語にしても、正しくヤ行の「江」を書いたものは青本に見るたったの2例である。残りの表記は、実はア行の「え」に属する仮名ばかりである。ここにはヤ行の「江」とア行の「衣」との問題が露呈していることになるが、この事も後に詳しく論じたい。

総じて言えば、全体で58語中56語が誤りという表記を生み出した原本を、「誤認され易い文字」で書いただけで、誤りはないとするのは、やや強弁に過ぎるのではないだろうか。

三 混同の原因をさぐる

後掲の資料(1)は、『土左日記』の青本・定家本・三条西家本に使われている問題の文字の一覧である。ア行のe(衣)とヤ行のye(江)、それにハ行のhe(部)を取り上げておいたが、右側に①～⑤の数字の付いている文字は特によく使用されているものである。

池田博士は、ヤ行の江とハ行のへとの混同をもたらした誤認され易い文字は、ヤ行江の①が最も妥当だとされた。(第一部・P.160) この文字は、連綿体で書かれると、「へ」の①と誤り易くなると

言われるのである。

ところが、このハ行の「へ」と読み誤り易い連綿体で書かれたヤ行江①の文字は、現存する多くの写本類（その多くは印刷公刊された影印本及び専門書、関連書の中に写真印刷されたものによつたが、注②）の中ではほとんど見つからない。ようやく資料（2）（伝紀貫之「自家集切」）にぶつかり、二重傍線部Aの文字が「へ」とも「江」とも読み得るかと思つたのだが、これとても実は「へ」①の連綿体であつて、「江①」ではないことに気づく。（注③） しかも、この例は既に池田博士が読み誤り易い文字として提示されていたのである。（第一部・P.160） 勿論、貫之自筆本『土左日記』の写本、青本・定家本・三条西家本には、これに類する文字は見当たらない。これはある意味では当然かもしれない。貫之自筆本は10世紀中葉の書記であるのに、これらの写本は、13世紀から15世紀末にかけて書写されたものであり、この三、四百年の間に仮名文字の字体に変化が生じていたと考えるのが普通であるからである。つまり、これら写本の書き手は、10世紀中葉の貫之の字体に見慣れていなかったということは言えるだろう。

『土左日記』の写本の奥書きを見ると、「一字も違へず」書き写したとある一方、「読み得ざるところ多し」としたものに会う。『土左日記』の貫之自筆本を直接臨写した四系統の中で、文字遣いまで原本に忠実に書写したと思われるのは、為家筆本を伝える青本のみである。これは藤原定家が貫之自筆本を書写した折、最後の二ページ分（「むまれしも」以下の部分）を貫之の筆跡そのままに書き写しておいてくれたことから判明する。青本以外では、定家本を含めて、三条西家本も日本大学図書館蔵本も、仮名の使用（その仮名にどの字体を使うか）に関しては、筆者の恣意にまかせたものとなっているのである。青本にしたところで、一箇所「衣都久佐数」（「えつくさず」の仮名文字を元の漢字で示した）の部分で「衣川久佐数」と表記している有様である。写本は、原本に忠実に写したとはいうものの、それは書かれている事柄をそのまま写したのであつて、文字の使い方までそっくり真似たものではないことは、資料（3）～（6）の文字の使い方を見ても明らかであろう。

以上の事柄を踏まえた上で、改めて〔表1〕で提示された二つの問題点を考えてみたい。

(1) ヤ行「え」とア行「え」との問題

橋本進吉博士によれば、「え」にあたる二つの音（即ちア行のエとヤ行のエ）の区別は、平安時代に入ってからのはじめの数十年間はなお保たれ、仮名でも書き分けられていたが、村上天皇の頃になると全く失われたようだという。（注④） これに従えば、貫之が『土左日記』を書いた頃は、既に両音の区別が失われていたと思われる。そうでなければ、〔表1〕で現れた e・ye 音表記の実態は説明できない。

即ち、例えば三条西家本の筆者実隆は、「見ゆ」の未然形「見え」（それは池田博士に従えば、「へ」と読み誤り易いヤ行エ（江①）を語尾に持つものであるが）を「見衣③」または「み衣⑤」と書いている。つまり実際は、貫之自筆本の「み江①」を確かに「ミエ」と読んだのである。しかし、彼

は「み江①」とは書かなかった。これは彼にとって、「み江①」と書こうが「見衣③」と書こうが「み衣⑤」と書こうが同じことだったからである。同じ音「ミエ」なのだから。

「見江（ヤ行）」と「見衣（ア行）」とが同じ音を表すものでなければ、[表1] e・ya 欄に出てくるような自在な表記は出てこないだろう。これは、貫之の時代、既にヤ行のエとア行のエとは同音であったとする橋本博士の説（もう現在では定説と言ってもよいかと思われるが、築島裕博士は、やや時代を下げ、両音の区別は天曆年間（10世紀半ば）頃まではあったとしている。注⑤）を証拠立てるものとなっていよう。（定家本についても同じ事が言えるが、定家の書写意識については後に別項でまとめて述べる。）

さて、ここにもう一点、ヤ行「え」ア行「エ」同音説を補強する語がある。名詞「住江」の表記である。これは本文に三回現れるが、その箇所は次の通りである。

- 2月5日 (1) すみのえのまつよりさきに
 (2) すみのえにふねさしよせよ
 (3) すみのえ、わすれくさ

この「すみのえ」の表記の状況をまとめたものが【表2】である。

【表2】

	(1)	(2)	(3)
青本	須みの江	須みの江①	数みの江②
定本	住の衣④	数みの衣④	数みの江
西本	須ミの江①	須ミ乃江①	すみ能衣③

※青本の(1)及び定本の(3)は、「漢字の江」

[表2]によれば、[表1]の「e・ye類」と同様、ヤ行の「江」とア行の「衣」とが混在していることが見てとれる。定家にしても実隆にしても、「すみのへ」でなく「すみのえ」と読んだことは、青本の為家と同様であったと思われる。これは、原本（貫之自筆本）の表記が「見ゆ」「絶ゆ」の未然形活用語尾の表記（「へ」に誤り易い「江①」）ではなく、明確な漢字の「江」字であったためと思われる。

ところで、ここに注意すべき事柄が一つある。それは、ヤ行の「え」とア行の「え」とが同音であったのなら、本来ア行の「え」で書かれるべきア行下二段活用の動詞の未然形・連用形が、はたしてヤ行の「え」で書かれているかどうか、ということである。（ア行の「エ」とヤ行の「え」とが混在していたのなら、ア行・ヤ行同音説は完璧ということになる。）

『土左日記』には、ア行下二段活用の動詞「得」は、二回出現する。

1月20日 心をや聞きえたりけむ

2月16日 物も絶えずえさせたり

この部分について調べてみると、青本も定本も西本も全て「衣」または「え」と表記されている。

また、活用はしないが、可能の副詞「え」について調べてみると次の12例は全てア行の「え」に当たる「衣」「え」「盈」で表記されており、ヤ行の「え」（「江」）で書かれているものはない。

12月26日 これにえ書かず

12月27日 人々もえ耐へず

1月1日 え飲まずなりぬ

1月4日 え出でたたず

1月4日 なほしもえあらで

1月9日 えまさらず

1月18日 えしらぬ花

1月18日 人みなえあらで

1月18日 え学ばず

1月18日 えよみすゑがたかるべし

2月4日 日もえ計らぬがため

2月16日 多かれど、えつくさず

こうしてみると、表記のゆれは、ヤ行のエに限って現れているように思える。

(2) ヤ行「え」とハ行「へ」との問題

ハ行音が語中及び語尾ではワ行音に発音されるというハ行転呼音は、古くは奈良時代にその例を見るが(注⑥)、平安時代に入ってから広がり、10世紀後半から11世紀初頭にかけて一般化したという。(注⑦) 『土左日記』においても、その例を一語みることができる。

2月4日 うるわしき貝、石など

写本では、青本及び三条西家本では「うるわしき」とあるが、定家本では「うるはしき」となっている。(これは後述するように、定家本のもつ特異な性格の表れとみる。)従って『土左日記』においても、語中及び語尾にハ行音を持つ語は、実際にはワ行音で発音されていた可能性を常に視野に入れておかねばならない。これを『土左日記』に現れるハ行の動詞「思ふ」で確認してみよう。

1月7日 白馬を^{おも}おもへど

1月9日 かくおもへば

1月9日 なにともおもへらず

1月21日 ちちははありしとおもへば

1月26日 いつしかとおもへばにや

2月 1日 きく人のおもへるやう

2月 1日 よしとおもへることを

2月 16日 京にはいらんとおもへば

この八例の「おもへ」を調べたところ、青本・定本・西本のどの表記も「おもへ」であり、「おもえ」となっているものは一例もない。

また、『土左日記』に使われている他のハ行の動詞「言ふ」「合ふ」等の四段活用に属するものや「堪ふ」「加ふ」（共に下二段活用）の表記も活用語尾は全てハ行で記されており、ワ行（ア行）で記されているものはない。

これによれば、『土左日記』の時代は既にハ行転呼音の現象は進行しつつあるものの、それが「うるわし」のように、表記にまでは反映していたものは少なかったと思われる。いつの時代でもそうであろうが、音韻の変化は早く、表記の変化は遅いのである。

四 まとめ 付 定家本について

これまで述べてきたことをまとめてみると、次のようになろう。

- (1) 「見^え江」「見^え衣」の表記が両存するところからみて、『土左日記』の書かれた頃には、ヤ行のエとア行のエは既に同音化していたものと思われる。
- (2) それにもかかわらず、動詞「得」や副詞「え」が全てア行の「衣」で書かれているのは、これらが語頭（あるいは語頭と同じ扱いを受ける一音節動詞、一音節副詞であったこと）にあるためと思われる。(注⑧)
- (3) 本来「見^え江」「絶^え江」とヤ行で書くべきものが、ハ行の「見へ」「絶へ」と書かれた理由は、表記上でいえば、ハ行転呼音は関与していないと思われる。

こう考えてくると、「見え」「思ほえ」「聞こえ」「絶え」が、写本のほとんどの部分で「見へ」「思ほへ」「聞こへ」「絶へ」と書かれた合理的理由を見出すことは難しい。そこで、改めて資料(3)～(6)を見直すと、青本・三条西家本のほとんどの表記がハ行の「へ」で書かれ、多くの個所で一致していることに気づく。(定家本の表記を同時に見ることによって生ずる混乱が晴れていく思いがする。)つまり、両本が共に、「見へ」「思ほへ」「聞こへ」「絶へ」と記した部分は、原本(貫之筆本)にもそう書かれていたのだと考えるのが最も自然なのではあるまいか。両本がハ行の「へ」で書いた個所は、「見へ」では7個所中の4個所、「思ほへ」では、2個所全部、「聞こへ」も2個所全部、「絶へ」は5個所中の4個所に及ぶ。この16個所中の12個所は、少なくとも、貫之が自筆本の中で「へ」と表記したことが想定されるのではないか。どの写本を点検してみても、内容はともかく、表記、特に文字の使用には筆記者の個人的特色(筆癖)が現れている。貫之が圧倒的に多いハ行四段活用、ハ行下二段活用の動詞の表記にひかれて、ヤ行下二段活用のこれらの活用語尾を

書き誤ったとしても、それは誰でもが起こす失敗のひとつに過ぎない。むしろ、貫之の書記には全く誤りがない、と考える方が無理というものであろう。

最後に、定家本に関して一言述べておきたい。写本を点検すると確かにこの本は「本文の書写校訂に際して恣意的な改訂を加えることが多く、まことに信用し難い本文と化している」という萩谷朴氏の批判（注⑨）は当然のように受け取れる。定家が本文を書き改めているのは事実であろう。ただ、その書き改め方は決して恣意的なものとは言えまい。定家は、貫之の『土左日記』を自ら読み解いたように書き改めたのではないか。その例証を冒頭部に見よう。

青本では「をともすなる日記といふものを、をむなもしてみんとてするなり」とあるのを、①「すなる」を「すという」と改めている。この「なる」は一般的に言う「伝聞」の意味であることを明確・平易に書き改めたのである。次に②「してみん」を「して心みむ」と改めている。これは妙な改変で、「書いてみよう」の意を「書いてためしてみよう」というくどい表現になってくる。しかし、この部分には「をむなもし（女文字）」という隠し意味があるとしたら、「女文字でためしてみよう」という意味になり、全く重複した意味とはならない。（注⑩）定家はこの隠し意味に気づき、それがわかるように書き改めたのではないだろうか。即ち、定家の写本の姿勢は、自ら読解した内容を読み手に伝えることにあったのではなかろうか。

このことは表記についても言える。俗に「定家仮名遣い」と言われるような表記の基準を自分なりに確立していた定家であるから、貫之の表記と言えども正否はただすという姿勢を持っていたのであろう。それが、例えば「見ゆ」の表記に見られるように、貫之が「見へ」と書き誤ったものであれば、遠慮なく「見え」と直したのではないか。今回取り上げた4語の表記で、文法的に正しい表記は定家本に最も多い。

その定家が、いずれも日記の後半に表記のゆれを見せているのは何故であろうか。これは次の課題としておきたい。

【注】

- ① 日本教育大学院大学紀要『教育総合研究』第2号<研究ノート> P.145
- ② 例えば、『図説 日本の漢字』（大修館書店 平成10年）、雑誌「書に遊ぶ」（とまと 平成13年9月号）、雑誌「芸術新潮」（新潮社 平成18年2月号）等
- ③ これは「ひとのいへに」と書かれた詞書きの部分の「へ」に当たる文字である。
- ④ 橋本進吉『国語音韻の研究』P.80（岩波書店 昭和25年）
- ⑤ 築島裕『国語学』P.29（東京大学出版会 昭和39年）
- ⑥ 佐藤喜代治博士はその例として『万葉集』の「潤八川」と「潤和川」の交替を挙げておられる。『新版 国語学要説』P.30（朝倉書店 昭和48年）
- ⑦ 注⑤のP.29、注⑥のP.31による。

- ⑧ これについては<研究ノート>で馬淵和夫博士説を紹介済みである。
- ⑨ 新典社版『影印本土左日記』（新訂版）解説 P.11 昭和 43 年
- ⑩ 「女文字」という隠し意味については、小松英雄博士の卓見が発表されている。
『古典再入門』小松英雄（笠間書院 平成 18 年）

<参考文献> 上記[注]にあるものは除く

- 1 『古典の批判的処置に関する研究』（昭 16） 池田亀鑑 岩波書店
- 2 『影印・解説・校註 土左日記』<日本大学図書館蔵本>（昭 45） 鈴木知太郎 笠間書院
- 3 『影印本 土左日記』<青谿書屋本>（昭 43） 荻谷朴 新典社
- 4 「青谿書屋本『土左日記』の極めて少ない独自誤謬について」（昭 63） 荻谷朴『中古文学』41
- 5 『国語音韻論』（昭 46） 馬淵和夫 笠間書院
- 6 『校註 土左日記』<三条西家本>（昭 18） 松尾聡 武蔵野書院
- 7 『定家本 土左日記 複製』（昭 3） 育徳財団

資料(1)

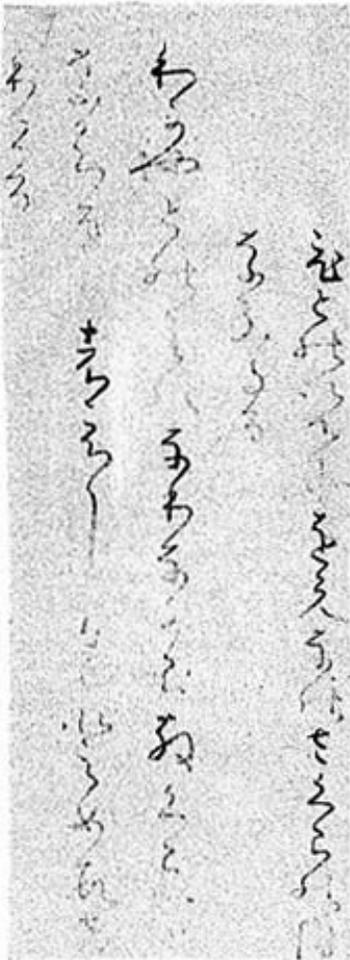
写本に見られる変体平仮名

元 ①
 衣 ②
 衣 ③
 衣 ④
 衣 ⑤

江 ①
 江 ②

部 ①
 部 ②
 部 ③

資料(2)



資料(3)

(一)「見」に続くもの(「見ゆ」の未然形「見え」)

十二月二十三日

いほよみ(あはれ)に

見えよ

見えよ

〔背本〕

〔定家本〕

〔三条西家本〕

一月九日

かねのいよみつあはれあね

見えよ

見えよ

一月九日

けんくもあはれ

見えよ

見えよ

一月十一日

やみのあはれやうもみ(あ)

見えよ

見えよ

一月三十日

けんくもあはれ

見えよ

見えよ

二月一日

まよみ(あはれ)に **見**るよ(あ)

見えよ

二月十六日

けんくもあはれ

見えよ

見えよ

資料(4)

②「思は」に続くもの(「思はゆ」の未然形・連用形「思はえ」)

【青本】

【定家本】

【三条西家本】

一月十八日

やんけいへ

＊
なほほ

やんけいへ

一月二十日

やんけいへ
＊
なほほ
えいへ

やんけいへ

資料(5)

③「思は」に続くもの(「思はゆ」の連用形「思はえ」)

【青本】

【定家本】

【三条西家本】

一月二十一日

やんけいへ
＊
なほほ

やんけいへ

二月九日

やんけいへ
＊
なほほ

やんけいへ

資料(6)

(4)「絶」に続くもの(「絶ゆ」の未然形・連用形「絶え」)

【吉本】

【定家本】

【三条西家本】

一月五日

いづくかあまのつらき^{*}に^{*}絶え

あま

一月二十五日

いづくかあまのつらき^{*}に^{*}絶え

あま

一月二十七日

いづくかあまのつらき^{*}に^{*}絶え

あま

二月九日

いづくかあまのつらき^{*}に^{*}絶え

あま

二月十六日

いづくかあまのつらき^{*}に^{*}絶え

あま

Research Paper

Features of *Kana* Expressions in *Tosa Nikki* :

Focusing on “*E*” in “*A-Gyo*” and “*E*” in “*Ya-Gyo*”

Ishizuka, Hideo

In a research note in the previous issue of this journal, I pointed out two problems with *kana* expressions in *Tosa Nikki*, or *Tosa Diary*, in the *Seikei-Shookubon* version. In this research paper, I focused on the first problem, that is, the confusion of “e” in “ya-gyo” and “he” in “ha-gyo.” I researched this problem and made a case that confusion already occurred in the original work of *Tosa Nikki*, handwritten by *Kino Tsurayuki*.

Key words: *Tosa Nikki*, “e” in “ya-gyo”, “i” in “a-gyo”, “he” in “ha-gyo”
